

< ワイルドで行こう >

ジャーニーランの一日の走破距離は、60km 前後が無難、70km になると「ガンバラなくては」、80km を越えると「そりゃあイカンぜよ」となる。

今日 26 日は、下関～長門だ。この間 80km に宿を見つけることができなかった。なんとかして長門まで辿り着かなくてはならない。

4月26日火曜日、2:30 起床、4:00 出発。昨夜は、お利口さんにも近くのラーメン屋で夕食を済ませ、7:30 には寝たから大丈夫だ。

スタート直後の交差点、信号待ちの車からリズム感のある曲が聞こえて来た。「オッ! ステッペンウルフやないか」、懐かしいアメリカンロック「ワイルドで行こう」だ。「ボーンツビー～ワア～イルド ♪ ♪」ってやつだ。途端、心が浮き立った。

「ワイルドで行こう」は、1960 年代後半から 1970 年代前半にかけてアメリカで活躍したバンド、ステッペンウルフの出世曲だ。映画「イージーライダー」の挿入歌に使用されたのをきっかけに、日本でも爆発的に売れた。その独特で軽快なロックンロールは、最近 CM にもよく使われているので、ご存知の方も多いかと思う。

Born To Be Wild---ワイルドで行こう。よし、今日はこの気分でいこう。ストリートの狼となつて、なんとしても長門まで行っちゃるど。早くもエンジンに火が付き、下関の市街地を疾走するのだった。「ボーンツビー～ワア～イルド ♪ ♪」のフレーズを何回も喚きながら、重戦車は行った。

下関に別れを告げ、北浦街道をひたすら北進した。27km 地点の川棚温泉駅前を通過したのが 7:30 だった。ホテル「おたふく」のある所だ。

「おたふく」の温泉は特徴がないが、イタリアンレストランは素敵だった。前菜に尻高ニイナが出たのにはビックリした。「冗談だろ」と思って食べてみたら、度肝を抜かれるほど美味だった。

私は若い頃、素潜りが趣味で、専らアワビとトコブシだけを採り、ニイナ等には目もくれなかった。「こんなものが食えるか」と馬鹿にさえしていた。それなのに、目の前にあるのは何だ。「ニイナは美味しいんだ。名人の手にかかるとスーパーになる。」と認識を改めざるを得なかった。その後出された料理も斬新なもので、イタリアンの常識を覆された。機会があれば、もう一度あのシェフの料理を食べたい。

通学の高校生、中学生に交って響灘沿いを北上する。「おはようございます」の声が気持ちよい。負けずに私も「おはよう」と返す。時々変な道に迷い入るが、すぐに気付き正道に戻った。400m 走って 100m 歩くというガジャガジャ走行を 20 回程繰り返し、40km 地点の二見という所にやって来た。夫婦岩があるが、伊勢の二見浦と何か関係があるのかな。

ここでルートを変えて右折し、県道 39 号線に入った。そのまま国道 191 号線を北上し、特牛(こっとい)には向かう予定だったが、昨日栗秋さんから教わって変更した。山道だが車が少なく、のんびりと走れるらしい。

200m のトンネルを抜けると、本当に田舎道だった。国道の喧騒から逃れられて、疲れが薄らぐ。鄙びた集落がポツポツとあり、道は山陰線と並行していた。だんだん上っていくが、ちゃんと歩道が整備されており、脚にはこない。ジャーニーランナーにとって、フラットな歩道ほど有難いものはない。

7km ほど奥に入ると、滝部という町があった。鉄道はここで左折し、39 号を横切って特牛方面に延びている。その踏切で遮断機が降り、目の前をアールデコ調の「みすゞ潮彩号」が通過した。1 時間半に一本の割合でしか列車が通らず、しかも、1 日片道二本しか運行されていないのに踏切で出逢うなんて、鉄道ファンにとってなんと幸運な間合いだろう。ちょっとした感動だった。脚でする旅でしか味わえないことだ。

線路を股ごし、その先にあるスーパーでリンゴを一つ買った。リンゴ一つを手を持って、レジに並ぶのは気が引けるなんてもんじゃないが、そんなことは言っておれない。食べる時に食っておかねば、次はいつ食べるか分からないのだ。そのリンゴを歩きながら食べる。カスを捨ててはならないので、芯の部分も全部食べた。ワイルドで行こう!

県道 39 号を北進し、栗野峠という、さほど険しくない山道にさしかかった。車も通らず、大好きな道である。上りは歩き、下りは傘をステッキ代わりにしてスタスタと走る。途中、蕨狩りをしているご夫婦に出会った。ガードレールを乗り越えて、斜面で採っていたのだろう。奥さんの方が、道に戻れなくて難儀をしているようだった。すかさず手を貸す。知らん顔をして通り過ぎることはできない。

栗野川沿いに進み、栗野橋で国道 191 号線と再会した。あと 23~24km ってところか。時刻は 13:00 で、ほぼ予定通りだ。橋から 3km の所で右折し、「みのりロード」というバイパスに入る。これも予定通りの行動だ。地図上では、明らかに国道より短いし、交通量も少なく気分がいいだろう、と考えたからだ。

しかし、私は迂闊だった。このとき、ホルダーのボトルには 3 分の 1 位しか水が入っていなかったのである。道はきれいで、通りは少なく、アップダウンも知れている。期待通りのルートだが、自販機が全くない。ここは、広域農道だったのだ。気付くのが遅すぎる。

行けども行けども水気がない。ついにボトルは空になり、一番やってはいけない脱水症状の予兆が感じられた。辛うじて小さな沢を見つけ、下りてみたが水は流れていない。岩のすき間からにじみ出ているだけだった。それでも私にはオアシスだ。腹ばいになって、石清水に吸いついた。ワイルドで行こう!

山が低いので、ため池から来ている水かも知れないが、構ったこっちゃない。今の私には、ダイヤモンドよりも貴重な命水だった。

なんとか脱水は免れたものの、また直に渴きを覚える。閉鎖された工場や墓地に立ち寄りてみるが、水道は止められていた。このままではヤバイぞ、と焦り始めた瞬間、300m ほど前方に農家が見えた。蜃気楼かもしれないと、目を何度も擦ったが実物だった。

「ごめん下さい。旅のものですが、水をいただけないでしょうか。」と訪うと、奥さんが

出てきて、「水道が納屋の角にありますから、どうぞ。この道路沿いには販売機がありませんからねえ。」と対応してくれた。

老いたおと一さん犬が近寄って来て、手をペロペロと舐める。ゴクゴクと水を飲み、ボトルにもいっぱい詰め、ワンちゃんの頭をなでてお暇した。彼が、しっぽをふって見送ってくれる。「おい! おまえ、今度は気を付けて行けよ!!」と言っているようだった。

うまい水で、すっかり息を吹き返した私は、間もなく国道に戻り、今日のゴール地、長門に辿り着いたのだった。長い長い一日だった。気持は「ワイルドで行った」が、身体は「ワイルドに砕けた」に違いない。明日はダメだろうな。

宿、長門セントラルホテルは、JR 長門駅の近くだ。青海島巡りや竹輪で有名な仙崎は、3km 北にある。数年前の夏、萩であったアクアスロンの帰りに、仙崎港で飲んで食べたビールと竹輪の旨さが忘れられない。特にビールは、渴いた喉に沁み込んで唸ったものだった。今までで一番うまかったビールは?と訊かれれば、迷わず「あんときのビール」と応える。

コインランドリーの乾燥時間が 40 分なので、近くの居酒屋に直行した。目当ての「大阪屋」は、三軒居酒屋長屋の中央にあった。ネットで調査済みのNo.1 候補の店だ。仙崎漁港に上がった新鮮な魚を提供するとのことである。

他所では、日頃食べないものに挑戦する前向きな姿勢が大切だ。そこで、小鯛の刺身とフライを注文することにした。家では、鯛の刺身はまず食べない。

恐る恐る口に入れてみると、「アラ!こらいけるわ」、ねっとりアッサリして魚臭さが微塵もない。フライの方は、旨いのは当然で、鯛を肴に生ビール(中)を五杯も空けてしまった。

Over80km でワイルドに砕けた身体には、酒も食べ物もガンガン入っていく。♫にごはんセットをいただいて店を出ようとすると、カウンターの向う側の若いお客さんが目に入った。見たこともない様な巨大卵焼きを食べている。L 玉 4 個使っているようで、「しまった、これを注文しとけば良かった。」と、ここでも後ろ髪を曳かれた。

‘11 春の旅では、また新しい技を身に付けた。ランドリー時間の有効利用だ。普通、洗濯に 40 分、乾燥に 30~40 分かかる。今までは、乾燥を終えて街に出かけていたが、これは無駄だと気付いた(遅えちゅうの)。

部屋に入ると、先ず風呂に湯を入れ、着ているものを脱ぎリュックの中身をその辺にまき散らす。汗を流した後、洗濯物を抱えてコインランドリールームに行き、機械を回す。500ml のビールを買って部屋に戻り、それを空けつつ髭を剃り、脚のケアをし物品の整理をする。

頃合いを見計らって身づくろいをし、再びランドリー機の所へ行き乾燥を始めるのだ。そのまま放っておいても、使う人がいない時はホッカホッカに乾くし、いる時はフロントで保管しておいてくれる。つい最近知ったことだ。

という訳で、半時間以上早く飲みにいけるのである。まっ、とりたてて言うほどのことでもないか。



《 みすゞ潮彩号 》